

76. 再び守山市金ヶ森西遺跡 出土の石製模造品について

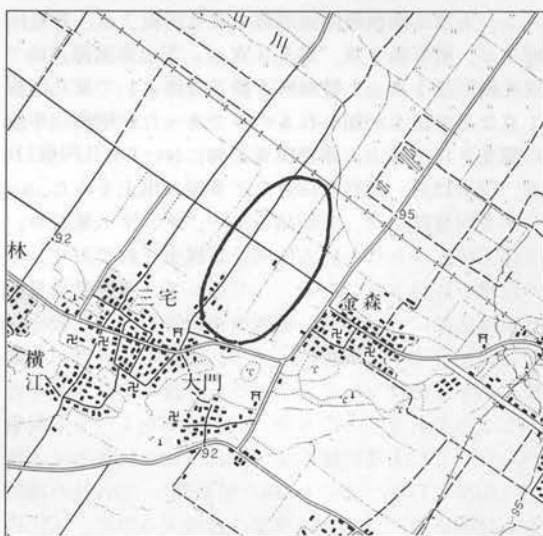
守山市三宅町・金ヶ森町一帯に広がる金ヶ森西遺跡は、古墳時代前期から鎌倉時代まで断続的に営まれた大集落跡であるが、昭和53年以降3ヶ年にわたって、湖南中部流域下水道工事に先立つ発掘調査を実施し、その実態がかなり明らかになってきた。このうち本遺跡の一つの特徴とみられる滑石製模造品については、さきに本誌で紹介したところであるが(注1)その後、以下にみるごとく、相次いでこの種の遺物の出土をみるようになった。そこで再び、その概要を報告するとともに、若干の考察を試みてみた。

1

1は滑石製の模造鏡である。径5.2cm、厚さ1.2cmの円板に、高さ0.8cmのつまみを削り出す。つまみの両側から、径0.6cmの貫通する円孔を穿ち、上面は粗いカット面を残す。下面は丁寧なみがかれ、各方向の調整痕がみられる。

本品は発掘調査による出土品ではなく、金ヶ森西遺跡の昭和53年度調査地点の隣接地で、翌昭和55年2月水路掘削がなされた際、大量の土器の散布しているのを発見された。守山市三宅町の三品定雄氏が、土器とともに採集されたもので、同町の横江鹿治郎氏を通じて、守山市教育委員会に提出された。(注2)昭和53年度の調査では、古墳時代前期後半の土器を大量に含む水路を検出しており、本品とともに採集した土器も、大半が布留式に通有なものであり、本品もかかる年代に属するものとみられる。

ところで、この種の遺物の出土は、県下においてこれまでに知られておらず、本例を初見とする。この種の遺物も、実用品ではなく、祭祀用具として使用されたとみられ、多くの場合祭祀遺跡において出土している。(注3)本遺跡においても、かつて壺の中に入った小型珠文鏡が発見され、昭和53年度調査においても、大小4点の有孔円板が、古墳時代前期の水路肩部から出土しており、後述するように、昭和54年度調査におい



ても、古墳時代前期の水路上層より、有孔円板1点の出土が知られ、本遺跡の特異な性格を更めて確認するのである。

2

2は、昭和55年3月に実施した、金ヶ森西遺跡の第三次調査において、遺跡を東から西へ貫流するとみられる水路上層より発見されたもので、上述の模造鏡出土地点の北70m余、53年度調査における出土地点の北120m付近にあたる。滑石製の双孔円板で、径3.1cm、厚さ0.3cmとやや大型で、中央に径0.15cmの小円孔を二ヶ所に穿っている。両面および側面は、ほぼ一定方向から研磨されている。本品も他の出土例と同様、布留式とみられる土器群と伴出しており、古墳時代前期後半代に比定しうるのであろう。

金ヶ森西遺跡では、これまで実施した三次にわたる調査で、東西流する水路50本余をはじめ、竪穴住居址数棟・掘立柱建物・土壇のほか、多数のピットを検出している。水路の大部分は自然水路で、その年代も古墳時代前期から鎌倉時代におよんでおり、又、古墳時代前期とみられる竪穴住居址をはじめ、大部分の遺構はかなり削平されており、長期にわたる野洲川の氾濫の歴史を物語っている。今回出土のものも含め、これ

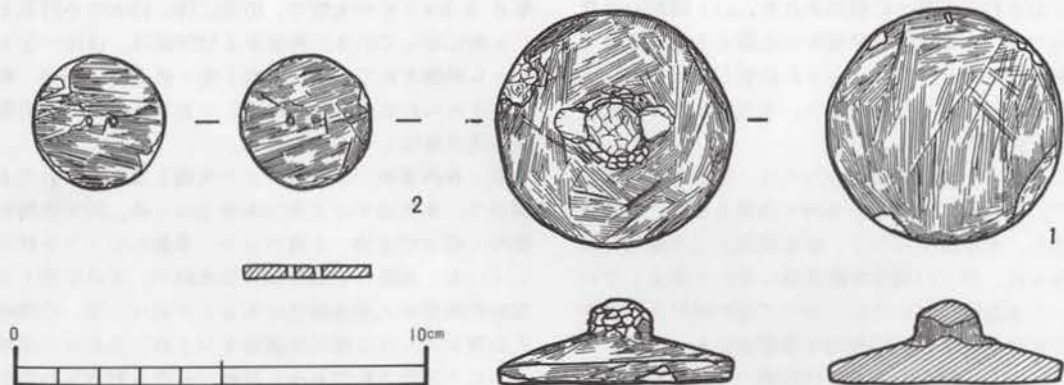
までに出土した石製模造品は、集落の周辺部ではなくほぼ中心に近いところで発見されており、集落内の水路近辺でかかる祭祀が舉行されたことが伺え、祭祀のあり方を示唆するものと言えよう。

3

石製模造品の出土例は、県内においては比較的少なく、従来においては、大津市天神山祭祀遺跡で円形石材が、(注4) 栗東町新開2号墳の北遺構より双孔円板1点(注5)大津市湖西線関係遺跡で双孔円板7点、単孔円板2点、剣形品2点、勾玉3点(注6)守山市服部遺跡で双孔剣形品1点(注7)野洲町下線子遺跡(注8)で双孔円板1点などの出土が知られるのみであったが昭和52年度に調査された守山市播磨田東遺跡において有孔円板118点、勾玉12点、剣形品18点など多量の出土をみた。(注9) しかも同遺跡では、未製品のほか、チップ・原石や、玉作工房とみられる竪穴住居址が検出されており、その性格が目ざされている。したがって、本遺跡発見の石製模造品についても、播磨田東遺跡例との比較検討が必要となるが、現在のところ、積極的に両者の共通性を示す証拠はないようであり、今後の検討がまたれるところである。ところで、祭祀遺跡をまつりの対象から分類した大場磐雄氏は、(1)自然物を対象とする祭祀(山岳・岩石・湖沼・海島・樹木等)、(2)古社の境内および関係地の祭祀、(3)墳墓に付属する祭祀、(4)住居に付属する祭祀の四種をあげておられる。(注10) これからみれば、本遺跡の場合、(1)の自然物、なかでも水の信仰にかかわるものであることは間違いなく、この種の祭祀のいくつかの例から推して、まつり終了後、水中に投棄されたものと思われる。水の信仰は、言うまでもなく、水稲耕作に深く関連するものであり豊かな収穫を祈り、春まつりとして行われるのを常としたようである。(注11) しかしながら、本遺跡でなされた「まつり」の具体的なあり方は、依然として不明と言わざるを得ない。(大橋信弥)

注

- (1) 大橋信弥「守山市金ヶ森西遺跡出土の有孔円板について」(『滋賀文化財だより』18 1978)
 - (2) 昭和55年2月、筆者と守山市教委の山崎秀二氏は、三品・横江両氏の案内で、出土地点の現地調査を実施することができた。更めて両氏に謝意を表したい。
 - (3) 大場磐雄編『神道考古学講座』第二巻、原始神道期(1972)など参照。
 - (4) 『滋賀県遺跡目録』昭和36年度
 - (5) 西田弘、鈴木博司、金関恕「栗東町安養寺古墳群調査報告・新開古墳」(『滋賀県史蹟調査報告』第十二冊 1961)
 - (6) 田辺昭三編『湖西線関係遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会、1973)
 - (7) 大橋信弥ほか『服部遺跡発掘調査概報』(滋賀県教育委員会 1979)
 - (8) 大橋信弥・別所健二・谷口徹「野洲町下線子遺跡E・S地区」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ-II 1977)
 - (9) 山崎秀二ほか「守山市播磨田東遺跡の玉作工房址とその遺物」(『滋賀文化財だより』18 1978)
 - (10) 大場磐雄『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—』(1971)、同『まつり—考古学がさぐる古代の祭—』(1967)ここでは後者によった。
 - (11) 柳田国男「雷神信仰の変遷」(『妹の力』所収 1941)、林屋辰三郎『日本の古代文化』(1971)
- [補注] 山崎秀二氏の御教示によれば、昭和54年度調査された吉身南遺跡で、双孔円板2点が出土したという。同遺跡では古墳時代中期後半の竪穴住居址が多数検出されており、円板もかかる住居址内より出土したものである。(『吉身南遺跡発掘調査報告書』 守山市教育委員会、近刊)



77. 守山市幸津川町下新川神社 保存の土器について

はじめに

守山市の北部、野洲川の南北二流にはさまれた中洲地区のはば中央、新野洲川放水路の左岸に幸津川町がある。丁度、市立埋蔵文化財センターの対岸である。集落の中程に鎮座する下新川神社は市内で数少ない式内社で、毎年5月4・5の両日、境内及び集落の内において行われる「長刀踊」「すし切りまつり」は県内の奇祭として周知されているところである。この無形民俗文化財の記録保存調査にかかわり、昭和55年盛夏に同神社の所蔵文書の虫干しがなされ、その際に以下記すところの遺物が発見されたのである。この保管について、地元の神社氏子総代や宮世話の方々に事情を聞いたが、生憎知っておられる方はおられず、確定した出土場所を知るに至らなかった。ここではその概要を報告し、あわせて出土当時にさぐることにした。



1

桐箱に収められていた遺物は4点あった。須恵器2点(壺、盤)、土師器2点(坏、甕)である。

壺1 器高12.1cm、口径10.2cmの小型壺である。口縁部は外面に肥厚させており頸部にかけて外反している。頸部下半及び体部にかけてカキ目調整が行

われている。色調はちゃ色をおびた灰黒色である。

盤2 口径14.4cm、器高2.4cmで青灰色を呈す。外上方に短くのびる口縁と平坦な底部である。内面は横撫で、外面は口縁部は横撫で、底部は粘土紐痕が残り調整不良である。

坏6 口径11.6cm、器高5.4cmで黄褐色を呈す。ゆるく内彎した底部から口縁にかけて大きく内彎してのびる。口縁部はやや尖りぎみであるが、全体にぶ厚く、胎土は砂粒が多く混入する。

甕4 口径13.0cm、器高11.8cmでちゃ褐色を呈す。口縁端部は三角形に内にのび、口縁はわずかに外反する。体部は球形よりもやや胴が張る形状である。口縁内外は指横撫で、体部は上位が縦方向、下位はハケを施した後にヘラ削り、底部はヘラ削りがみられる、内面は斜め方向の細かいいねいなハケ目調整である。

さて、この甕に墨書されている人面を紹介しよう。図に示すように、眉から鼻までは一本に連なり、中で眉だけは、意図したものかどうか明瞭でないが、上にはねたと思われるのが2ヶ所みられる。鼻端は不明瞭である。目は左右ほぼ同じ形状で黒目部分も描き、向かって右の目が上にある。口はやはり不明瞭で左半は読みとれない。一見、大きな口で一部歯を描き出しているかと思われる線がみえる。耳は描いていない。そして、人面に向かって右側に墨書文字が2ヶ所みられる。左側は海百、海百、海面と考えられ、右側は□幼民とみられる。

2

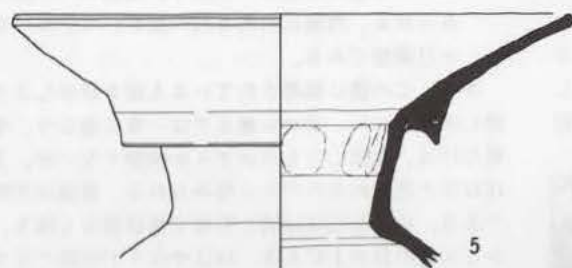
以上のほかにもう一点、複合口縁の土器が別の場所に保管されていた(5)。そこでこれらのものが、どこで出土したのかという疑問が起こってくる。この土器が収納されている桐箱の中に明治42年と昭和3年の新聞のあったことがヒントになるのではなからうかと考えた。つまり、土器が包装される時に数十年前のものを使用する可能性が少ないことから、昭和3年前後、明治42年前後の2回にその出土時期を考えてよいであろう。この場合、明治42年以前として、出土した時期と場所についてみると、明治29年の少し後が有力となる。この明治29年には湖国史上、最大の洪水、浸水記録があり、中洲地区をはじめ、かなりの範囲にわたって浸水があったことが伝えられている。この後には相当の土砂の堆積があったと思われる、耕地の復元に日夜農民が努力したと語られる。この耕地復旧作業は服部遺跡の発掘調査で実に正確な復元を行ったことが知られた。現在の水路は明治当時のそれを踏襲したものとみられるが、その水路の下層に奈良時代末期の水路が検出されたのである。この溝内には多量の遺物が含ま

れ、木簡、墨書土器、銅銭がみられた。そこで、その結論から言うとこれらの遺物は中洲地区一帯に、施行された条里制の地割を、明治29年の少し後に、復旧する際に出土したものではないかと考えられるのである。

さて、墨書人面土器は県内で初例ではないかと思われるが、田中勝弘氏が論じられた資料を参考にすれば、出土地は水に関係した遺構が多く、奈良時代には河川と人工溝、平安時代には河川・井戸が多いとされている。器形も広口埴が河川で、それ以外が河川、人工溝、井戸で多いとされ、文献などを参照して、疫病神除けの古式の呪術的行為と考えられている。本例で特筆さ

れるのは人面墨書の他に文字が2ヶ所みられることである。田中氏が報告された26例中に他の墨書土器を伴出しているとの記述があるが、同一個体に文字と人面が記入されるのは少ないようである。ただその墨書文字が不明瞭なので、人面と同様に書かれた意図が判然とし兼ねるのが残念である。ただ、河川に流されるのが目的として「海□」と書かれ、「□幼民」と書かれるのは何故なのだろう。発見されて完存する土器には人面しか書かれていないとすれば、呪文や文字などは他の板(木簡)に書いて流したのではないのか。

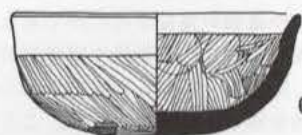
(山崎秀二・岩崎 茂・清水好洋・山田謙吾)



5



1



6



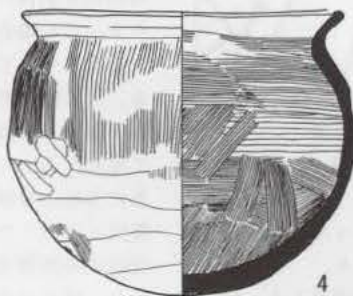
3



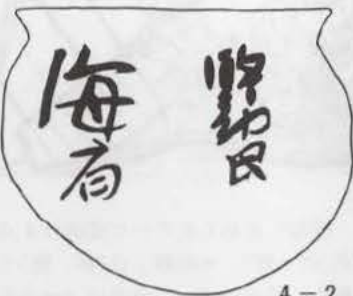
2



4-1



4



4-2